

学生会員の

声

●就職活動でも実感した化学工学の力●

私は幼少期からものづくりに対する興味が底知れず、ダンボールや画用紙を手に入れては毎日オリジナルの工作に勤しんでいた。その後も、中学や高校では数学や物理、化学といった理系教科に親しみを持ちながら学習してきた、根っからの理系人間であった。しかし、漠然とした理系人間であった私には突出して興味のある分野があったわけではなく、大学ではなんとなく化学や物理に触れられそうだからという理由だけで物質化学系の学類に進んだ。そこから流れに身を任せているうちに学部2年次で化学工学課程に配属されることとなった。私と化学工学との出会いは偶然であった。

化学工学の講義では、エネルギーや物質の輸送、蒸留や抽出、熱力学など、ほとんどの科目で微分方程式を立てて積分、計算、計算…であった。もちろん理系人間である私には、決してつまらないものではなく、中高生の頃のように数学を楽しんでいる中に物理化学も盛り込まれた大満足セットのようなもので、日々熱心に学習していた。しかし、蒸留塔プロセス設計のような実践的な講義は時折あれど、基本的には世の役に立つことを学んでいるという感覚は薄く、座学として知識を得る楽しさにとどまっていた。

座学で知識を重ねた私はやがて学部4年次に研究室配属を迎え、現在の研究室への所属が決定した。この時私が取り組むこととなった研究テーマは「Ni電鍍による金型製造プロセスにおける電鍍欠陥の低減」である。このテーマではNi電鍍で金型を製造することを目的としているが、ただ製造できれば良いというわけではなく、生産コストや効率の観点から、より短い時間で精度の高い金型を製造することが重要となっている。

私はこのテーマに触れて初めて、ものづくりにおける製造プロセスの重要性について本格的に考えることができた。ただ製品を作ることができさえすれば良いというわけがなく、世の中の当然のように大量生産されている製品達は、いずれも緻密なプロセス設計を経た生産技術の賜物で

あるという、よく考えれば当たり前の事実、このタイミングでようやく気付いた。

大学院に進学し修士1年となった私は、ほどなくして就職活動を始めた。私は大学入試の頃と同様、特に業界を絞ることもなく、とりあえず理系人間が活躍できそうな企業の説明会に参加し続けた。化学、食品、飲料、医薬品、様々な業界のメーカーの話を聞いているうちに私は気付いた。どの業界でも化学工学の知見を持つ人材は重宝されており、化学工学なくしては企業が成り立たないことを強く説明する企業すらあった。生産技術職はもちろん、研究開発の場でも重宝されているようだった。研究活動を通して化学工学の重要性についてはある程度理解したつもりになっていたが、社会に欠かせないあらゆるメーカーからこれほどまで求められているものであるという事実に驚いた。これはすなわち、私が学んできたことは陰ながら社会に大きく貢献しているということであり、私はそんなやりがいのある仕事に挑戦する切符を持つことができているのだと感激した。

化学工学会第54回秋季大会において、私はそれまでの研究成果を口頭発表する機会をいただいた。私と同じセッションだけでも名立たる企業の方々が参加されており、私の拙い発表にも興味を示し、質問を投げかけてくださった。また、皆様の発表や質疑応答でも活発な議論がおこなわれており、非常に勉強となる貴重な機会となった。企業で働いている方々が化学工学について熱く議論している、学習をしている、成果発表をしている。これまで説明会の中で何うことしかできなかった魅力をまさに目の当たりにすることができた。社会を支えている化学工学の解像度が私の中で益々鮮明となっていった。そして、私もここにいる方々のような、常に学習を続け、得た知識を社会貢献に活かすことのできる技術者を目指したいと決心した。単に私自身が発表するだけのつもりで参加したこの学会は、私の人生の指針を決定づけるものとなった。

現在、就職活動は本格化し、いよいよ私の今後の人生の方向が決まろうとしている。当初定まっていなかった志望業界も、説明会や先の学会を通じて考えが固まり、化学メーカーの研究開発職への入社を目指して活動中である。大学・大学院で6年間学んだものを確実に自分の武器とし、無事に社会に出た暁にはこれを存分に発揮したい。更に、そこでは先の学会で目の当たりにしたような先輩方と出会えることに期待している。そして、将来的には私自身も同様に学会に参加し、聴講する学生に刺激を与えられるような技術者となっていきたい。

偶然出会った化学工学であったが、数年のうちにその魅力に惹き込まれていった私は、この道で陰ながら社会貢献し続ける人生にしていきたい。

(大阪公立大学大学院工学研究科物質化学生命系専攻 溝畑凌生)